

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01009

研究課題名（和文）旧在地支配層のミクロヒストリーから見る現代中央アジア国家形成：クルグズを中心に

研究課題名（英文）The State-Building of Modern Central Asia Reconsidered Based on the Microhistory of the Kirghiz Ex-ruling Class

研究代表者

秋山 徹（Akiyama, Tetsu）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90704809

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中央アジアの山岳遊牧民クルグズにおける民族共和国が成立プロセスを、ロシア革命期からソヴィエト時代初頭における部族首領層の動向から検討した。部族首領層は、ロシア帝政期に蓄積された多様な社会的資本を駆使しつつ生存を図るとともに、ソヴィエト権力も彼らを活用する側面が少なからずあった。部族首領の中には、20世紀初頭に「民族のリーダー」としてのイメージを有するようになった者もあったが、ソヴィエト体制の下でそれはしぶとく生き残ったばかりか、むしろ普及すらしていった。以上に示した研究成果は日本国内外の学会や研究会において口頭報告を実施し、そこで得られた批判やコメントを参照しつつ論文を執筆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1920年代初頭にソヴィエト政権の下で実施された民族共和国史境界画定は、中央ユーラシア近現代史のメインイシューである「民族の創成」の重要な画期をなす。そのプロセスを巡っては、政治エリートや近代的知識人の活動を中心として、多くの研究が積み重ねられてきた。これに対し、本研究は、従来十分に光が当てられてきたとは言いがたい部族首領層の動向に着目し、「伝統」と「近代」が緋い交ぜになった、混沌とした「中間領域」を、旧ソ連地域に散逸する公文書史料や民間所蔵文書といった膨大かつ多様な史資料を駆使することで再構成し、民族共和国の創設過程をより多面的に理解するための一つの参照点を提供した。

研究成果の概要（英文）：This study reconsidered the state-building process among the Kirghiz, the mountain nomads of Central Asia, by focusing on the activities of tribal chieftains from the Revolutionary to the early Soviet era. The social capital accumulated among the Kirghiz tribal chieftains in the pre-revolutionary era allowed them to survive the chaotic environment; it was the local Soviet authorities that were obliged to rely on the tribal chieftains to facilitate the Soviet building. Among the tribal chieftains, some had gained a certain kind of recognition as the “leader of Kirghiz” until the beginning of the twentieth century. In the early Soviet era, such a national recognition not so much lingered but became more widespread among the public. The results of this study were reported both in the domestic and international workshops and published as articles.

研究分野：中央ユーラシア近現代史

キーワード：中央ユーラシア 中央アジア ソ連 ナショナリズム 遊牧民

1. 研究開始当初の背景

中央アジア現代国家の原型は、ロシア革命を経て成立したソ連政権のもと、1920年代初頭に形作られたことが知られている。こうしたことから、中央アジア現代国家の成立・展開過程は、1991年のソ連邦解体を出発点とするのではなく、ロシア革命からソ連邦の成立までをも含む、より長期的スパンの中で歴史的に考察することが不可欠である。しかし当該時期の中央アジアは、史料及びイデオロギー上の制約を受けていたことから、長らく一次史料に基づく本格的な実証的研究の対象とはならなかった。すなわち、日本を含む西側の研究者にはソ連邦の公文書史料への直接的なアクセスが閉ざされていたため、研究の多くは、「社会主義革命の勝利」や共産主義イデオロギーといった、ソ連政権の公式的見解や歴史観によって制約されざるを得ず、ソ連政権側の視点に立脚した、政治権力の制度史的研究が主流を占めてきた。1980年代に始まるペレストロイカの進展やソ連邦の解体に伴い、上述のような史料的・イデオロギー的制約は解かれ、研究環境は格段に向上しつつある。

こうした中で、ロシア革命からソ連体制の成立・展開過程において中央アジア現地民が果たした役割にも光が当てられるようになってきた。その際に先行したのは近代化の原動力となった知識人(インテリゲンツィア)を巡る研究であり、これまで多くの成果が蓄積されてきた。しかし、近代化途上の中央アジアにおいて依然勢力を有していたのは在地の伝統的な有力者層であり、現代国家の形成過程において彼らが果たした役割を無視することはできない。特に遊牧民地域においては、彼らの集団化が強制的定住化とセットで実施されるとともに、在地の伝統的な有力者層は「封建上層」や「階級の敵」として厳しく糾弾され、その撲滅が企図された。最終的に、そうした伝統的な有力者層が現地社会において実質的な権力を喪失していったことは確かであるとしても、果たして、そのプロセスは、ソ連政権の思惑通りに単線的に進展したのか。また、在地社会における彼らの位置づけ及び意義はどのように変化したのか、といった問いが課題として残されている。

2. 研究の目的

こうした問いに答えるものとして、本研究は、中央アジア現代国家の成り立ちと展開の一端を、遊牧系民族クルグズの在地支配層「マナプ」の動向分析を軸として、複合的かつ実証的に明らかにすることを目的とする。中央アジアに居住する他の民族に比して、クルグズにおいては部族的伝統が強固であり、マナプたちは20世紀に入ってもなお大きな存在感を有していた。ソ連時代初期においては「マナプとの闘い」をスローガンに彼らの撲滅が図られたものの、そうした「対マナプ闘争」が単線的かつ円滑に進展したとは言い難く、彼らはソ連時代初期以降も一定の存在感を保持し続けていたものと想定される。本研究は、こうしたマナプ層を、従来示されたような一方的に弾圧され消えゆく伝統的支配層としてではなく、ソ連政権とクルグズ社会を結ぶ在地の「協力者」(コラボレーター)として位置づけるとともに、両者の緊張を孕んだ相互関係を実証的に描き出すことを目的とする。

3. 研究の方法

これまで本研究の代表者は、当代を代表するシャブダン・ジャンタイ(1839ca. - 1912)というクルグズ首領の生涯に焦点を当てて、クルグズ遊牧社会におけるロシア支配の様態や在地社会の変容を描出した(拙著『遊牧英雄とロシア帝国: あるクルグズ首領の軌跡』東京大学出版会、2016年)。本研究はその続編ということになる。すなわち、本研究は、シャブダンの息子たちをはじめとする、その子孫の動向を具体的に明らかにすることを通して、中央アジア現代史の再構成を図る。本研究は、ロシア革命期からソ連時代初期を考察の対象としており、以下に示す、相互に関連する二つの柱によって構成される。本研究の第一の柱は、当該時期におけるシャブダンの子孫たちの動向について、その実相と意義を、旧ソ連地域に散在する公文書館史料や民間所蔵資料にもとづいて実証的に検討する。本研究の第二の柱として、ソ連初期から中期に至るまでのシャブダンに対する評価の変化を、公文書館史料に加え、戯曲や映画といったメディアにも目を配りながら解明する。

4. 研究成果

【1】ロシア革命期からソ連時代初期におけるシャブダンの子孫たちの動向について

当該時期におけるシャブダンの子孫たち、就中その息子たち シャブダノフ兄弟 の動向を把握するに当たって、彼らが政治や地域共同体における活動を実質的に開始する、20世紀初頭のロシア帝国統治期にまでさかのぼって検討した。その結果、彼らが、イスラーム実践や、企業家としての活動などを通して、金銭のみならず人脈といった様々な「資本」を蓄積しつつあったことが明らかとなった。

こうして蓄積された様々な「資本」は、1916年叛乱後、移牧先の新疆に在って、シャブダノフ兄弟の生存に大きく寄与した。彼らは、遊牧民ならではの機動力をベースに、持てる「資本」を総動員して生存を図っていたことが明らかとなった。この点に関しては、2020年7月に、関連する内外の研究者を集めて開催した国際ワークショップ International Workshop: The Revolt of

1916 in Central Asia and Refugees into Xinjiang: Reconsideration from the Cross-border Perspective (オンライン)において“Four years in Xinjiang: Considering the Impact of the Kirghiz Heads of the 1916 Revolt on the Soviet Building”というタイトルで報告を行なった。

1919年末から1921年にかけての内戦状況のもと、トルキスタンのソヴィエト権力はシャブダノフ兄弟に近づき、その取り込みを図るとともに、彼らを新疆難民帰還事業や赤軍義勇兵を徵募する為に活用した。他方で、シャブダノフ兄弟はソヴィエト政権への「協力」を通して、ソヴィエト領への帰還後の身の安全保障と居住地の確保を図ろうとした。

ソヴィエト領への帰還後、シャブダノフ兄弟は共和国の政治抗争に巻き込まれ、流刑による彼らの排除が企図された。しかし、こうした状況に際し、シャブダノフ兄弟は無策に手を拱いていた訳では無かった。彼らは様々な人脈＝コネクションを駆使して、流刑決議を廃棄に追い込もうとしていたことが明らかとなった。この点に関しては、2023年2月に開催された国際ワークショップ(オンライン)“SHATTERZONE: Présentation ANR Shatterzone Violences exterminatrices aux marges des empires : Le Caucase et l’Asie centrale, au-delà de la Grande Guerre (1912-1924)”において、“A Blind Side of the Formation of Soviet Kyrgyzstan: The Path of a Warlord Family 1911-1927”と題する報告を行なった。

【2】ソ連初期から中期に至るまでのシャブダンに対する評価の変化

「民族のリーダー」としてのシャブダンイメージは、クルグズの間で半ば自己完結的に発生したものではなかった。むしろそれは、19世紀中期から20世紀初頭にかけて展開したロシア支配の成立と展開を通して、すなわちコレボレーターとしてそのプロセスに深くコミットする中で醸成された副産物であった。こうして生成しつつあった「民族のリーダー」としてのイメージを、クルグズ民族史の文脈に定置し、書籍の形で結晶化したものが、オスマンアリーの『シャドマーンに捧げしクルグズの歴史』(1914年)であった。この点に関しては、2021年に上梓した英文単著 *The Qirghiz Baatir and the Russian Empire: A Portrait of a Local Intermediary in Russian Central Asia* (Leiden-Boston: Brill, 2021)に反映させた。

ソ連時代の到来は、20世紀初頭に結晶化しつつあった「民族のリーダー」としてシャブダン像の終焉と消滅を意味しなかった。それは、新しい体制の下でしぶとく生き残ったばかりか、むしろ反対に普及すらしていった。クルグズ知識人、カスム・トゥヌスタノフの戯曲「シャブダン」(1931年)が先鋭的に示すように、シャブダンと決別しようとするほど、皮肉にも、彼についての知識をより精緻なものにし、民衆に対する「民族のリーダー」としてのシャブダン像の普及を助長しかねないというジレンマに陥った。

シャブダンをはじめとするマナブ層についての学知が、ソ連体制の下で組織された民族学調査のみならず、ロシア帝政期に生み出された地方史や民族史 なくなく、シャブダンの資金援助で刊行されたオスマンアリーの『シャドマーンに捧げしクルグズの歴史』 依拠していたことが明らかとなった。こうしたことは、インテレクチュアル・ヒストリーにおけるロシア帝政末期とソ連時代初期の連続性という、より大きな問題を考える上での一つの参照点となる。

コレボレーターであるがゆえに抱えざるをえない、「民族のリーダー」としてのシャブダン像がはらむジレンマがあったこともまた明らかとなった。カマル・シャブダノフによって書かれた伝記『我が父シャブダン・パートゥルの生涯』(1947年)の記述からは、フェルガナ征服作戦をはじめとするロシアの軍事侵攻の手先となったことから、シャブダンはあくまでも「侵略者」なのであり、「民族のリーダー」として仰ぐことに抵抗感や反発を感じるクルグズが少なからず存在したことを改めて確認することができた。この点に関しては、2021年3月に開催された日本中央アジア学会年次大会(オンライン)において、「遊牧英雄から民族英雄へ?クルグズ首領シャブダンをめぐる歴史実践を中心に」というタイトルで研究報告を実施し、それに基づいて、「遊牧英雄の黄昏、民族英雄の黎明: 民族創成過程における対露協力者の位置づけをめぐって」と題する論文を野田仁(編)『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2023年)に寄稿した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 遊牧戦士の近代：大国ロシアと向き合うリーダーたち
3. 学会等名 かわさき市民アカデミー（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 スレイマンの玉座への眼差し：20世紀初頭の刊行物を手掛かりとして
3. 学会等名 日本アルタイ学会第57回野尻湖クルルタイ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 山と人新世：中央アジア山岳地域の歴史研究から考える
3. 学会等名 WIASセミナーシリーズ「人新世と人文学」第3回公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 マイノリティの歴史叙述：サルトカルマクの歴史書を翻訳して
3. 学会等名 日本中央アジア学会年次大会公開パネルセッション「マイノリティ研究の新地平：ユーラシア近現代史の多声的再構成に向けて」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tetsu Akiyama
2. 発表標題 Four years in Xinjiang: Considering the impact of the Kirghiz heads of the 1916 revolt on the Soviet building
3. 学会等名 The revolt of 1916 in Central Asia and refugees into Xinjiang: Reconsideration from the cross border perspective
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 遊牧英雄から民族英雄へ？クルグズ首領シャブダンをめぐる歴史実践を中心に
3. 学会等名 日本中央アジア学会年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tetsu Akiyama
2. 発表標題 evlopment of a Realism-Based Risk Distribution Strategy: Focusing on the Survival Strategy of a Kirghiz Chieftain Family
3. 学会等名 The 16th Biennial Conference of the European Society for Central Asian Studies (ESCAS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tetsu Akiyama
2. 発表標題 Reconsideration the Building Process of Soviet Kyrgyzstan from the Family History of a Descendants of a Tribal Chieftain: 1916-1956
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference of Slavic Eurasian Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 遊牧英雄の末裔たちの現代史(1) : あるクルグズ首領一族の軌跡1916 - 1927
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター客員研究員セミナー(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 露領中央アジア遊牧系軍事エリートの次世代育成
3. 学会等名 高等研究所セミナーシリーズ【新しい世界史像の可能性】公開講演会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 遊牧英雄の末裔たちの現代史(2) : カマル・シャブダノフの生涯(1880 - 1948)とその位置づけをめぐって
3. 学会等名 北海道中央ユーラシア研究会第136回例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 ソ連中央アジア創成期におけるクルグズ人旧首領一族の動向 : 民間所蔵史料と公文書館史料による復元の試み
3. 学会等名 日本中央アジア学会年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 秋山徹
2. 発表標題 まつろわぬ協力者：「巡礼」で読み解く中央アジア遊牧社会
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター2022年度公開講座「溶解する帝国 - ロシア帝国崩壊を境界地域から考える」（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Tetsu Akiyama	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Brill	5. 総ページ数 144
3. 書名 The Qirghiz Baatir and the Russian Empire: A Portrait of a Local Intermediary in Russian Central Asia	

1. 著者名 野田仁、長峰博之、David Brophy、小沼孝博、塩谷哲史、近藤信彰、木村暁、秋山徹、野田仁、小野亮介、磯貝真澄	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	5. 総ページ数 246
3. 書名 近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The revolt of 1916 in Central Asia and refugees into Xinjiang: Reconsideration from the cross border perspective	開催年 2020年～2020年
--	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------